

イスラエルにおける神の救済史：特に、ヨセフについて

詩篇 105 編は 106 編と共に、主なる神による救済史を歌っている。詩編 104 編は創造主としての神と「被造世界」を歌うが、105 編は神の恵みとイスラエルの「歴史」(「契約と救済史」)を歌う。105 編は「ハレルヤ賛歌」の一つである。

45 節もあるので大まかな読みと黙想としよう。救済史を歌う詩では、主なる神もイスラエルも互いに「契約に心を留めること」(5 節、8 節、42 節参照)が重要である。

このような救済史の記念・記憶・告白の導入は、「主に感謝をささげ、御名を呼べ」(1 節)という呼びかけで始まっている。この導入部分も重要である。救済史はモーセとアロンに従い奴隷の地エジプトから脱出したことまでが歌われているが、16 節～24 節のヨセフへの言及が興味深い。「主は、人々が彼(ヨセフ)を卑しめて足枷をはめ/首に鉄の枷をはめることを許された。主の仰せが彼を火で練り清め/御言葉が実現するまで。」人の召命観また献身の決意は良いが、それは、苦く、苦しい経験を通して練り清められる必要がある。そうでなければ、ヨセフが「夢」を語り、父や兄たちを支配する鼻持ちならない者になる危険があったように、私たちもその危険にいつも直面していることになる。

1. 主なる神の名を呼び、感謝をささげよ (1～6 節)

「Yahweh に向かって感謝をささげて」彼の名を呼べ。」礼拝も信仰もまず神の呼び掛けがあり、それに応答する神への呼び掛けがあって可能となる。同じような姿勢への呼び掛けが言葉を重ねられて続く中で「心に留めること」が基本的なこととして勧められる。「主の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡を/主の口から出る裁きを」(5 節)心に留めよと言う。

2. 神の選び (6 節)

7 節以下に、主なる神とイスラエルとの「契約」(ベリイト)が言及され、さらに救済史が展開されるが、それらの基礎になるのが、アブラハム、(イサク)、ヤコブとその子らの「選び」である。これは神の恵みの業である。「選ぶ」とは、実証する、是認する、そして選ぶという意味になっただけ。「彼の選ばれた者」は「彼の愛された者、素晴らしい者」という意味も持つ。常に神が主導権を持って成立する関係である。そして、神の選ばれた者は、「僕」として生きる。

3. 主なる神のイスラエルとの「契約」と土地所有の約束 (7～11 節)

「主はわたしたちの神/主の審きは全地に及ぶ。」信仰の基本は Yahweh を自分たちの神とすること、主なる神がわたしたちの神となる人格的關係性の確立にあり、神の憐れみの審きはイスラエルだけではなく、「全地」を射程にいられたもの、普遍的な広がりを持つものである。この Yahweh はイスラエルになした「契約」をとこしえに「御心に留められる。それは行為と結びついた「言葉」を中心としたもので、具体的には神が世代にわたって示された幾千にもなる戒め(基本はトーラーであろうが)から成っている。「契約」は神ご自身の「誓い」によって、(ある聖書箇所では、他に誓う者が存在しないのでご自分に向かう誓いによって)確証されたものである。ここではアブラハムとの「契約」そしてイ

サクとの「誓い」となっているが内容的に「契約」と「誓い」は大きな区別はないのであろう。この文脈では、先に欠如していた「イサク」の名が登場している。それは 10 節で繰り返して説明される。「それを（主は同じものを）ヤコブに対する掟とし/イスラエルへのとこしえの契約として」（確認された）。

そして、この契約に「約束」が付加されて宣言される。「わたしはあなたにカナンの地を/嗣業として継がせよう」と。この約束はたぶん代々にわたって確立される「希望」であろう。だから、イスラエル建国や今日のガザでのハマースとイスラエルの武力闘争によるイスラエル側の根拠として、「カナンの地は自分たちのものであるから」と主張されてはならない。ここに危うさが潜んでいる。約束は選ばれた民が主なる神の「掟」「律法」に信従することと結びつけられているのである。参照 45 節の結語参照。

4. 救済史（12-44 節）

基本的に創世記と出エジプト記の物語が伝承される。ヘブライ人は「数少なく、寄留の民、小さな群れ」で、「クニ」形成などはできず、他の国、他の民の間を彷徨っていた、まさに。地上の放浪者であった。それゆえ、多くの困難があったが、主なる神はこの民を護られた。彼らは「僕」ではあるが、主は異邦の民と王に向かって「わたしが油注いだ人々に触れるな）、わたしの預言者たちに)災いをもたらすな」と警告して、彼らを守られたのであった。

パレスチナに飢饉があり、ヤコブたちはエジプトに逃れ、寄留するが、ちょうどエジプト王朝はセム族系でもあってそこで生き延びることができた。その中でヨセフ物語に言及される。主なる神は「あらかじめひとりの人（ヨセフ）を遣わされた。」一方では自己宣伝と兄弟たちの妬みによって奴隷として売られたのであるが、他方、それは主なる神による派遣であった。ヨセフは更に低くされ、ポティファルの妻に謀られて苦悩を味わうが、それらの苦悩はヨセフが語った夢、実は「主の言葉」が実現されるための試練であった。以下はお馴染みのモーセによる出エジプトの物語である。ここでも、42 節に「主は聖なる御言葉を御心に留め、僕アブラハムを御心に留められた。」と言われる。

5. 結語（45 節）

救済史を思い出させる歌は 45 節で結語を語る。「それゆえ彼らは主の掟を守り/主の教え（トーラー）に従わなければならない。ハレルヤ。」イスラエルの救いの歴史は想起され、感謝と賛美によって現在化され、希望の根拠となるが、それらに「戒め」を守って生活する課題が結びつけられている。